

途上国めぐり・つれづれ

見た、聞いた、体験したバリ島の人々とくらし

—日常と宗教—

インドネシアのバリ島は、インドネシア内では珍しくヒンズー教を信仰する人々が住む島で、よくバリヒンズーと表現されるが、インドのヒンズー教とは少し違い、バリ島に伝えられた歴史からひもとくと、仏教や土着のアニミズムと上手く融合され、溶け込んでいる。バリヒンズーの中では、仏陀もヒンズーの神のひとつであるが、決して多神教というわけではない。具現化できない絶対神を頂点に、その下にたくさんの神々で構成されている。良い神も悪い神もどちらも手厚く敬い、また、ブラックマジックやホワイトマジックなるものや、精霊などのスピリチュアルな世界が信じられており、生活と宗教がとても密着している。ここでは、私がバリ島を訪れた時に滞在するロスメン(民宿)のお父さんに聞いた話や、実際に体験した光景をまとめてみようと思う。



ロスメン敷地内にある寺院 2008年



平日の昼間でも寺院は大賑わい 2008年

このロスメンがあるのは、バリ島の中でも特に宗教を大事にし、絵画や音楽といった芸術で有名なウブド郡(デンパサール空港から山間に向かい車で約1時間)のタマン村にある。ロスメンのお父さんは、村の宗教行事でも中心的な人物で、伝統と宗教を重んずる「古いタイプ」の人。一年の半分は祭り等の様々な宗教行事に費やして、朝から晩までとにかく忙しい。バリ島では今でも宗教行事が最優先であり、村によっては、家族の中から祭りで働ける人を必ず一人は出さなければ村八分にされてしまうほど絶対である。日常生活においても、常に神々と生活は密着しており、敷地内の小さな寺院、玄関、各部屋の入り口、台所と、家の隅々の神様へ、草で編んだ皿の上に色とりどりの花とお米と線香などの供物と共に、朝夕のお祈りは欠かさない。寺院と表現するが、祠のようなもので敷地内に何棟も

建っており、様々な神様が祀られている。この祠が多いほど信仰深いということで、このロスメンには10棟以上あった。収入の相当な割合を宗教行事に費やしているのだが、人々は日常と宗教をバランスよく楽しんでいる。

子供たちも自然に宗教を重んずる生活を受け入れている。例えば最近では西洋風に誕生日会をするのだが、子供たちが集まり、ケーキにろうソクを立て、皆でバースデイソングを歌い（インドネシア語でやたら長い歌であった）、誕生日の子供がろうソクを吹き消す。ここまでは日本でもお馴染みの光景なのだが、その後、ケーキを切り分け、誕生日である主役の子供がスレンダン（腰紐）を付けて「略正装」し、誰が食べるよりもまず始めに、家の敷地内にある「寺院」にケーキをお供えして回る。それが終わってはじめて皆でケーキを食べるのだ。



朝晩のお供えと祈りは欠かさない 2008年



手作りケーキで誕生日会 2008年



腰紐をつけ略正装してケーキをお供え 2008年

また、祭りの時には、タトゥーの入ったちょっと悪そうなお兄ちゃん達もばっちり正装して友達と連れ立ってお供えやお線香を持って寺院へ行き、きちんと順番に並び神に祈りを捧げる。老若男女皆とにかく信仰心が強い。私も現地の人にまじり正装して寺院でお参りをするのだが、いまひとつ手順が慣れていないため、いつも聖水で全身ずぶ濡れになってしまうのだが、そんな状態であっても祈りの後はなんだか晴れやかな気持ちになるからやめられない。（古里友香：2007年7月から2009年4月までアールディーアイ広報部）

“アールディーアイ通信 No.39 2009年2月より”

途上国めぐり・つれづれ

見た、聞いた、体験したバリ島の人々とくらし

ーチャロナランー

「ウク暦」という7日×30の週(ウク)によって成り立ち、210日で1周とする暦があり、この暦に基づき様々な行事を執り行う。各村にはそれぞれ役割の違う寺院がいくつもあり、その各寺院には毎年オダランという「寺院建立祭」が回ってくる。例えば、1年で2回祭りが行われる年もある。

さらに、10年目、50年目、100年目と節目では大きな祭りが行われ、その間に、村合同のお葬式や、日本のお盆や正月といった行事が入り、外から見ていると一年中お祭りしているようにも見える。自分達の住んでいる地域の寺院だけでなく、寺院の総本山であるブサキ寺院(バリ島で一番高い聖なる山アグン山の麓にあり、一番格が高いとされる寺院)はもちろん、1日がかかりで遠くの寺院や海まで詣でることもしばしば。現代は車で移動できるが、昔は歩いて3日程かけてお参りに行ったそう。時には海を渡り、隣のジャワ島にある寺院まで行くことも。生活費の大半が祭りに費やされるこの生活。大人達にとっては、時間もお金もかかる大変な行事であるが、楽しみな事もたくさんあり、そのひとつが寺院で夜通し行われる踊りや人形劇などの催しだ。



司祭がご神体バロンに祈りを捧げる 2008年



魔女ランダに挑む戦士 2005年

就学前の幼い子供たちも夜遅くまで熱心に寺院で奉納の踊りを鑑賞している。その奉納踊りのひとつとして有名なのが、よくトランスダンスなんて訳されている「チャロナラン」である。この踊りは必ず寺院の敷地内で行われる大切な踊りで、例え観光用であっても必ず寺院で行う。

ご神体であるバロン(聖獣)とランダ(魔女)を用いて踊る。その為、踊りの前には聖職者



聖獣バロン、どこか日本の獅子舞と似ている 2008 年

この踊りの大義は「終わりなき善と悪の戦い」で、善の象徴である聖獣バロンと、悪の象徴である魔女ランダが戦い、その決着がつくことがない。万物には、そして人間の心の中にも必ず善と悪が存在し、どちらも存在するのがこの世界だという思想をもとにしている。悪の象徴ランダに立ち向かう上半身裸の戦士達は、クリス(聖剣)を持って戦うのだが、

ランダと戦う間にトランス状態になり、最後には自分の胸にこの聖剣を突き刺してしまう。不思議なことに裸の胸にその聖剣を突き刺しても血が流れない。以前、その聖剣を踊り後に触らせてもらったが、種も仕掛けもなく、かなり鋭いちゃんと切れる刃物であったのには驚いた。そこに聖職者が登場し、聖水をかけてトランス状態から目覚めさせるのだが、すぐに目覚める者もいれば、苦しそうに悶えてなかなか正気に戻らない者、失神してしまう者など様々だ。

観客は心配そうに戦士達を見守る。幼い頃より何十回、何百回と見てきただろうに、真剣な表情で見守る大人達。戦士達が全員正気に戻ったところで、観客はほっと胸をなでおろし、安堵の表情を浮かべる。これは「チャロナラン」が娯楽ではなく、現代においてもバリの人々にとって宗教的に大切な意味を持つということであろう。(古里友香)

“アールディーアイ通信 No.39 2009 年 2 月より ”

がご神体と大地に祈りを捧げる。観光用ではそのあたりを簡略化されていることもあるが、本当の祭りといえば本格的で、大地にお供えや聖水を供えるのだが、必ず生贄(若鶏が多い)の血を捧げる。首をちょん切られた鳥がバタバタと羽音をたてて大地を駆け回る様は、現代っ子の私は未だに直視できない。厳かに祈りをささげた後に踊りが始まる。



トランス状態で胸を剣で突く戦士 2005 年

途上国めぐり・つれづれ

見た、聞いた、体験したバリ島の人々とくらし

—子供と教育—

バリ島の人々の日常会話はバリ語である。このバリ語というのがとても厄介で、宗教と深くかかわっており、身分の上下で尊敬語、謙譲語と使い分けなければいけない。

私がロスメンのお父さんに聞いた話によると、バリ人の間にはカーストがあるため、初対面の場合は、まずは尊敬語またはインドネシア語で話し、会話しているうちに相手の階級がわかると、少しずつ階級に合わせた言葉に変えていくという。バリ人のカーストはインドほど厳しいカーストではなく、王族の貧乏さんもいれば、一番下の階級であってもお金持ちがいる。司祭を頂点に王族と平民からなる4階層で、奴隷階級というものは無い。名前を聞くとどのカーストかがわかるようになっている。なんだか聞いているだけで大変そうだ。

就学前の子供は、日常で使用するバリ語しか話せない。最近ではテレビの普及で、インドネシア語で放送されるアニメを見て、小学校前から片言を理解できる子供も増えているようだ。小学校に入学し、公用語であるイ



小学校 2008年

ンドネシア語を習う。授業は全てインドネシア語である。学校は2部制(朝7時からお昼まで、お昼から夕方まで)で、日本と同じように6・3・3制である。観光産業が盛んな島なので、小学生の頃より少しずつ外国語の授業が入る。中学生ともなると、英語の授業は週5時間、日本語の授業も選択で受けることができる。現金収入が一番多く得られるのが観光産業なので、外国語習得には熱心で、とくに日本語を話せる人が重宝され、高給を取ることができる。そのため、中学から日本語の授業が選択できるのだ。といっても、読み書きというよりは、日常会話の勉強であり、中学生に日本語授業で使用しているノートを見せてもらったところ、全てローマ字で書き取っていた。挨拶、数の数え方、色、時間の読み方、自己紹介の仕方等。もともと日本語と同じように、謙譲語や尊敬語があるバリ語を話す人たちなので、複雑な日本語もすぐに慣れるのだろう。授業で習っている日本語はお手本通りの美しい言葉であるので、中学生が話すにはなんだかすぐたい違和感があった。

彼らが日本語に触れる機会は多く、そのほとんどが日本のアニメで、もちろんインドネシア語に吹き替えられてはいるが、テーマソングは日本語そのままであったり、主人公の名前も日

本名で、日本の生活様式や文化そのままのアニメが多いため、自然と異文化の言葉を身につけられるようだ。様々な言語を小さい頃より勉強するので、バリ語・インドネシア語・英語・日本語と、4つを巧みに話し分けられる人がたくさんいる背景が窺えた。

余談であるが、寺院で祭りの時に、ワヤンクリという影絵劇（炎を焚いてその明かりでスクリーンに写し出す伝統芸能）が行われていたのだが、観覧しているのは白髪のおじいちゃんばかりであった。バリ人に聞いてみると、宗教的な古いストーリーで、言葉は古語に近い古いバリ語であるということで、最近の若者には理解されないらしい。例えば平家物語なんかを原文そのまま、朗々と読まれている感じではないかと、勝手に今の日本に当てはめて想像してみたのであった。（古里友香）

“アールディーアイ通信 No.39

2009年4月より”



↑↓ワヤンクリ 2008年



途上国めぐり・つれづれ

見た、聞いた、体験したバリ島の人々とくらし

—現金収入と内職—

私がお世話になるロスメン(民宿)は、田舎の旧家的な家族で、現金収入を得るために様々な方法をとっている。先祖から受け継いだ田畑などの土地は、小作人に貸して、取れた作物で土地代を納めてもらっている。

一番の現金収入は、家の一部を増改築してのロスメン経営。といっても短期旅行者用ではなく、長期で賃貸している部屋が多く、安定した現金が入るが旅行者に貸すよりは格段に安い収入だ。日本人の感覚でいうと、男性が定職を持ってあたりまえな感じであるが、バリ島では少し様子が違う。というのも、一家の長はとにかく祭りや行事への参加が多く、月に何日も行事や準備に費やす場合がある。まわりを見渡してみると、女性の定職率が高いように思った。ホテルのウエイレスや土産物屋の売り子等、安定的な現金収入を得る職業に就く女性が多い。小さな子供がいる女性でも、大家族で暮らしているため、育児は誰かが協力してくれる。男性はというと、農業以外では、バイクタクシーや、絵描き、ガムラン奏者と、なんだか不安定な収入の職業が多い。

ロスメンのお父さんも例に洩れず定職はなく、絵描きとして筆を走らせてはいるが、安定した収入は無い。そこでお母さんが現金収入を得るために、お菓子やお祈り用のお花を朝市に売りに行く。作るのは家族総出だが、売りに行くのはお母さん。やはり商売は女性のほうが上手いよう。朝市を見渡すと、商売しているのは圧倒的に女性だ。

内職作業は昼を過ぎ日差しが和らぐ頃から、お父さん、お母さん、子供、親戚の人、おじいちゃんなど数人が阿舎(あずまや)に集まり、おしゃべりしながら楽しそうに作業が始まる。毎日のことだから慣れたものである。お菓子作りは、まずは器作りから。葉をクルクルと巻いたり、編み込んだりして材料を詰める器を作る。器に詰めるのは、餅粉(白玉粉みたいな粉)を水で



お母さんは朝市でも商売しながら

手を休めず花作り 2008年



餅粉で餡を包みバナナの葉でくるんで蒸す 2008年

溶き、耳たぶくらいの硬さにしたものに、一緒に詰める餡（バナナ、ジャックフルーツ、パイナップル、ココナッツ等を油で炒めて砂糖で味付けしたもの）を変えてバリエーションを出す。他にもゼリー（といってもゼラチンではなく寒天で固める、ここでは天草を煮ていた）や、蒸しケーキ、もち米とココナッツのおこわ、蒸し饅頭と、多い時は10種類以上も作る。祭り期間のかき入れ時には、夜中の1時までお菓子を作ることがある。もちろんオーブンや電子レンジはないので、かまどに薪をくべて火力を調節しながら、焼いたり蒸したりするので大変だ。夜中の火の番はお父さんが担当していて、「お母さんは朝の5時に市場に行くから、先に休ませた」と優しい。



↑ 供え用の花はまず土台を作る
← 土台に赤・青・黄色の花を詰めて完成餅粉で餡を包みバナナの葉でくるんで蒸す

2008年



バリ人の器用さが証明される、お供え

これ総て食べ物でできている 2008年

お祭りシーズンには、お祈り用のお花がよく売れる。手のひらにすっぽり入る小さなブーケのようなもので、3つで10円程度で売れる。濃緑の広い葉で作った容れ物に、針葉樹の葉、枯れ葉、赤い花、黄色の花、青い花を見栄えよくブーケのようにセットして作る。私がお手伝いした時は、頑張っても3つで3分近くかかってしまう。さらには無言で集中して作るので、すぐ疲れてしまうのだが、家族の人はテレビを見ながら、お菓子を食べながら、お話ししながらと、リラックスして作業をしているので、疲れた様子はない。それでも私の作業より何倍も早く、バリ人の器用さに驚く。

お手伝いした翌日、お母さんの様子を見に朝市に行ってみた。手伝ったお菓子やお花がたくさん売れていたの、なんだか嬉しかった。100%手作りのお菓子は、優しく素朴な味わいで私は大好きだ。（古里友香）

“アールディーアイ通信 NO. 40 2009年4月より”